

# 蜘蛛

豊島与志雄

青空文庫



蜘蛛は面白い動物である。近代人的な過敏な神経と、偉人的な野性と、自然的な神秘さとを具えている。

近代人の神経は、何かしら不健康で不気味である。本物の動物的なものから根こぎにされたような趣きがある。運動的知覚がひどく鈍く、感情的知覚がひどく鋭い。この運動の方面の知覚と感情の方面の知覚とが、不均衡になればなるほど、益々病的に不気味になってゆく。——蜘蛛を見てもそういう感じがする。始終巢の真中にじつとして餌物を待ちすましてるところは、苛ら苛らしながら日向ぼっこをしてる近代人の倣がある。そして巢の僅かな微動にも緊張した神経が震えおののく様は、単なる触知でなしに、

感情的知覚の域にまでふみこんでる概おもむきがある。あのものぐさと敏感さとは、何かしら病的な不気味なものがある。

偉人は凡て野性を有するというのは、否、野性を有していなければ偉大な仕事は出来ないというのは、私の持論である。都会人的な巧妙さと精緻さとは、大きな仕事は成されない。野性と云うのに語弊があるならば、大地の中に根を張ってつつ立つてる力とでも云うような、何かしら人為的でない後天的でない本質的な力である。トルストイやバルザックやセークスピアの偉大さは、そういう力に依つてるところが多い。トルストイが如何に無抵抗の宗教を説こうと、彼の力は畢竟肉食的な野蠻な力の上に立っている。——蜘蛛にはそういった野性がある。彼が如何に精巧な巢

を張ろうと、如何に過敏な神経を持つていようと、それは到底文明的な所産ではない。文明的な所産となりきれないほど、彼のうちには肉食的な野性がある。細い糸に懸つて空に浮んでいても、地を這う虫けらよりも、遙に大地的であり遙に野性的である。

昔の人は、自然に対して一種の神秘的な恐怖を懷いた。そこから、自然力崇拜の宗教まで生れた。然るに、人間の数が増し文明が進むにつれて、そういう宗教は、そういう神秘的恐怖は、遠く山間僻地へ追いやられて、跡を絶とうとしている。けれども文明のさなかにも、都会の真中にも、ふとその痕跡が見出されることがある。——蜘蛛はその一つである。薄暗い土蔵の二階、物置の片隅、階段の裏などに、大きな蜘蛛の巣が張られていて、その真

中にあの不気味な怪物が控えている時、人の心には知らず識らず、一種の神秘的な恐れが湧いてくる。妖怪屋敷や廃墟壞屋に、いつも蜘蛛の巣がつきものとなっているのは、自然そのままの現象ではあるが、また人の心の自らなる連想作用でもある。

蜘蛛のうちでも最も傑出しているのは、女郎蜘蛛である。多くの蜘蛛はどす黒い汚い色をしているのに、彼だけは、背と腹部とに幾筋もの金線をめぐらして、誇らかに光り輝いている。多くの蜘蛛は昼間隠れて夜分姿を現わすのに、彼だけは、白昼も傲然と巣の真中に逆様に控えている。体躯も比較的大きく、最も精悍である。

その女郎蜘蛛が、東京の市内には見当らない。私は未だ嘗て市

内でその姿を見たことがない。他の蜘蛛は、それぞれの種類を市内で見かけるが、女郎蜘蛛だけはどこにもいない。けれども、東京の周囲、大森、玉川、赤羽、市川などには、女郎蜘蛛が沢山いる。

昨年の初秋、私は玉川に行ったついでに、大きな女郎蜘蛛を五六匹捕えてきた。ミルクの空缶に草の葉を軽くつめ、その間々に蜘蛛を入れ、四方に錐で空気ぬきの穴を拵えて、紐で下げて来たのだが、蜘蛛は別に弱った風も見えなかった。庭の木に放すと、のそりのそり梢の方へ這い上って行って、枝葉の茂みに隠れてしまった。

その晩私は楽しく眠れた。「土蜘蛛」や「滝夜叉姫」などの物

語を空想することは、吾々の生活を豊かにしてくれる。

そして翌朝、いつもより早く起き上つてみると、何という愉快さだつたろう。庭の木々の梢に、あちらこちらに、美事な大きな巣が張られていて、その真中に女郎蜘蛛が一匹ずつ、逆さにじつと構えこんで、背と腹の金筋を朝日に輝かしているのである。私は嬉しさの余り、妻や子供達を呼んだ。子供達は初めて見る女郎蜘蛛の不思議さと美しさに眼を見張った。美や神秘に対する子供の敏感さよ。だが、田舎の子供達は、女郎蜘蛛の巣で蟬取りの道具を拵えて遊ぶのである。

それから私は毎日、女郎蜘蛛を眺めて暮した。少しでも変な気配があれば、蜘蛛は巣を揺ぶつて警戒する。蠅や蛾が巣にかかれ

ば、一瞬の猶予もなく、飛びついて、くるくると白糸でからめて、巢の中央に持ち返り、暫く様子を窺つてから口をつける。生血を充分に吸う時その腹は大きくなり、食物の不足な時には心持ち小さくしぼんで見える。カステーラの屑を放つてやると、白糸でからめておいて食いつきはするが、やがてそのまま下に落してしまふ。私は幾度も、蛾や甲虫などを生捕つて投つてやった。青空の下にすかし見る蜘蛛の姿の、足が長く伸び腹が円くふくれて、背と腹の金筋が美しく輝き出すのが、私の喜びであつた。

けれども、蜘蛛は余り幸福でなさそうだった。風のために巢の破れることが多かつた。餌も不足がちのように見えた。早朝仄暗い頃、蚊の類の小さな羽虫が沢山引つかかつてる破れ巢の横糸を

食つてしまい、新らしい完全な巣を張つてしまうのを見定めて、私はそれに投げ与えるべき大きな昆虫を、どんなにか探し廻ったことだろう。そのために幾日か、太陽と共に起き上ったものである。

そして凡そ十日ほど過ぎた或る日の午後、私は一つの蜘蛛の巣に珍らしい光景を見出した。巣の中心から少し下の方に、蜘蛛がじつと動かないでいる。その一本の足に、羽の黒い足の長い赤蜂が、喘ぎながら一生懸命に喰いついている。蜘蛛は後ろ向きになったまま動かない。蜂は全身の力を口に籠めて、足先で蜘蛛の巣を払い落そうとしている。蜘蛛の足が喰い切られるか、蜂の足が巣の糸に絡まってしまふか、恐らく必死の努力であろう。

私は一人気を揉んだ。勿論蜘蛛に味方してである。然し迂濶に手出しは出来ない。やがて、蜂がぱつと飛んで逃げようとした。とたんに、蜘蛛はくるりと向き直るが早いか、くり出す白糸で蜂を絡めた。次にはもう、蜘蛛の足先でくるくる廻転されてる真白なものに過ぎなくなつた。凡てが一瞬間のうちの出来事だつた。私は蜘蛛の勝利を祝した。

私はそれですつかり安心してしまった。赤蜂は庭にいる虫類のうち之最も獰猛なものである。それに打勝つとすれば、蜘蛛にとつては万々歳である。

ところが、それから二三日後の午頃、一つの巢の蜘蛛が見えない。そして巢の真中から、一筋の糸が長く垂れている。私は驚い

て庭へ下りていった。巢から垂れた糸は、低い躑躅の茂みにはいり、更に地面へ達していて、そこに、女郎蜘蛛がぐったり腹這っている。そして驚くべきことには、躑躅の茂みの周囲に、一匹の赤蜂が飛び廻っていて、夢中に何かを深し求めてるかのようになり、私が側へ行っても逃げようとしなない。私はかっとなつて、女中を呼んで蠅叩きを取寄せ、蜂を叩き潰してやった。それから、静に蜘蛛を掌に取上げた。

蜘蛛はぐたりとなつたまま、生きてるのか死んでるのか分らなかつた。傷はどこにも見えず、姿勢もくずれてはいないが、動く模様が更にない。私はそれを室の隅に上から箆を被せておいた。そして二三日たつても、蜘蛛はそのまま生き返らなかつた。そ

のまるで生きて通りの蜘蛛の死体を、私は庭の隅に埋めた。

それから赤蜂の害が屢々起つた。私は赤蜂の姿を見かけると、蠅叩きで叩き潰してやった。が赤蜂は次から次へとやって来た。

三四匹一緒に飛んでることもあつた。女郎蜘蛛の姿が巢に見えな  
いなと思うと、それは大抵一筋の糸で巢から地面に落ちて、死体  
となつてしまつていた。背と腹との間のくびれた急所に、蜂から  
喰いつかれたらしい傷跡が見えるのもあつた。

そして、玉川から来た私の庭の女郎蜘蛛は皆、赤蜂のために害  
せられてしまった。残つてるのはただ、昼間隠れていて夕方から  
巢に出てくる泥坊蜘蛛ばかりである。

女郎蜘蛛のあの美しい色彩は、太陽の光の中で赤蜂の好目標と

なるのかも知れない。恐らく赤蜂は背後から狙い寄って、背と腹との間の急所に喰いつくのであろう。然し、その死体を別に食うのでもないらしいところを見ると、何故の襲撃か訳が分らない。それについては、何れ学者の示教を乞いたいと思つている。が兎に角、赤蜂が跋扈して女郎蜘蛛が減びるといふことは、淋しいことである。

田舎に旅をして、静寂な自然と素朴な人事とに接する喜びの大半は、都会人としてそれらに接するところにあるといふことが、一面の真理であるとするならば、都会に住んで庭に蜘蛛の巣を張らして楽しむのは、野人としての楽しみであるといふのも、一面の真理かも知れない。然しながら、蜘蛛を嫌う者は性格的に弱者

であり、蜘蛛を好む者は性格的に強者であると、そういうことが云われないものだろうか。偏奇な趣味の対象としては、蜘蛛は余りに多くのものを持っていると、蜘蛛好きの私は勝手な考え方をしたいのである。



# 青空文庫情報

底本：「豊島与志雄著作集 第六卷（随筆・評論・他）」未来社  
1967（昭和42）年11月10日第1刷発行

入力：tatsuki

校正：門田裕志

2006年4月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 蜘蛛

豊島与志雄

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>